

## 最終講義

*The Portrait of a Lady* との40年

——ジェイムズの本かなかったこと／言わなかったこと——

別 府 恵 子

## Summary

### Reading/Teaching James's *The Portrait of a Lady*, 1955–1998

Keiko Beppu

Necessarily, one comes back to one's first love, whether it be a person, a place, or a book. Which is the case with the topic of my "farewell lecture." My first encounter with Henry James (1843–1916) took place one fine summer day in 1955, my freshman year at Kobe College; I found a Modern Library Edition of *The Portrait of a Lady* at the Maruzen in Kyoto. Or rather James's *The Portrait* picked me up, before I took it from the shelf, quietly crying out, "Take me up, you young woman!" I read the novel of some 600 pages without a break, as I recall, but never thought I would be a professor of English/American literature and make a career of it for thirty some years. As Isabel says about her own choice of husband, neither could I "escape my fate." Hence the subject of my lecture, Reading/Teaching James's *The Portrait of a Lady*, 1955–1998.

*The Portrait of a Lady* (1881) is one of the most discussed of James's works. In the fate of his "frail vessel," Isabel Archer, James attempts to demonstrate how free one can be in one's choice in life. In his "Preface" to the New York Edition of *The Portrait* James writes: it is "an ado about Isabel Archer," an intelligent but presumptuous girl affronting her destiny. In other words James attempts to write a *bildungsroman* with a young woman as its "hero," which no author has ever done before him, and consequently he deconstructs the tradition of Victorian novel of which the motif is invariably "courtship and marriage." Isabel's free exploration of life is doomed, from the beginning, to fail; there is no expanding horizon for a person of her sex. The appeal of James's heroine, however, is just that gracious act of valor she shows at the end of the novel, taking the responsibility for her deliberate exercise of free will. Much as James adores his exponent of "free spirit," he nonetheless punishes Isabel for her audacity; she is "ground in the mill of convention."

The past few decades have seen a "rise and fall" of new critical theories, which put to test the legitimacy of literary texts. Only few will survive the ordeal, and *The Portrait of a Lady* is one of such resilient texts, and has yielded numerous readings at the hands of vigilant scholars, including film directors. Jane Campion's *The Portrait of a Lady* (1996) is quite a perceptive interpretation of James's text; Campion's film has given a clear visual representation of what is only implied in James's text—the sexuality of a Victorian "lady." Campion's *The Portrait* has turned out to be an eye witness to woman's suffering in 19th-century Anglo-American society.

One surmises that James's text will invite new different readings in future as well, because the reader continues to grow and will never be the same each time he or she comes back to *The Portrait of a Lady*.

## I. はじめに

まだ、最終講義には時間があると思っていましたが、予定より三年早く、その時がまいりました。そして、それにも拘わらず、最終講義をする機会が与えられたことを感謝いたします。30余年の間、教室で、アメリカ文学史、アメリカ現代詩、小説の講義を英語でしてまいりましたので、この最終講義も英語でするのが順当かとも考えたのですが、アセンブリー・アワーのプログラムという公共性を考慮して母国語ですることになりました。ただ、テキストからの引用は、原文のまま使用いたしますのでご了承ください。

わたくしが神戸女学院大学英文学科の教師として着任したのが、1968年4月、ミシガン大学大学院で修士を終えて帰国した時、いまから30年と半年前のことです。ですから、タイトルにあります「*The Portrait of a Lady* との40年」というのは10年ほど計算が合わないことになってますが、じつは、神戸女学院大学一年生であった1955年の夏、たまたま行った京都の丸善で見つけたのが、modern library 版の *The Portrait of a Lady* だったのです。その時は、アメリカ文学研究を仕事にすることなど想像だにいたしませんでしたし、ましてジェイムズで博士論文を書くなんて夢にも思いませんでした。おそらく、タイトルに惹かれて買い求めたペーパーバックだったと記憶しています。その時から数えて40——正確には43年——ということです。

夏の終わりのある昼下がり、三人の紳士が午後のお茶を楽しんでいる場面で始まるジェイムズの流麗な文体に魅了され、ヒロインのイザベルに自分を重ねて夢中になって読んだ作品がジェイムズの『ある婦人の肖像』なのです。いま振り返りますと不思議な因縁のようなものを感じるのです。因縁といえば、学部の卒業論文では20世紀のイギリス作家ヴァージニア・ウルフを取り上げたのですが、このこともいま思えば運命的な選択だったように思います。ともうしますのも、「意識の流れ」を見事に文字にしたウルフ文学——*Mrs. Dalloway*, *To the Lighthouse*, *The Waves*——の醍醐味だけでなく、フェミニズムの視点を20歳だったわたくしの意識の深層に植え付けてくれたのが、*A Room of One's Own* や *Three Guineas* の著者でもある「20世紀の知」＝ウルフとの出会いだったといまにして思うからです。

1966年の秋、はじめてミシガン大学大学院で受講したアメリカ文学のプロゼミの指導者がオスチン・ウォレンという著名な学者で、ウォレン教授のプロゼミではじめてヘンリー・ジェイムズを文学研究の対象として読んだのでした。ウォレン教授の思い出をひとつご披露します。今年マス・メディアが引き起こしたビル・クリントンの「偽証騒ぎ」がすでに過去のことになっていっていますが、20世紀末の現在でもピューリタニズムの根強いアメリカ文化のなかで「嘘をつく」ことの重大さを説かれたウォレン教授のゼミの時間に、fibbing＝ちょっとした「嘘をつく、つかない」を犯罪を犯したかのように断罪するなんて、ヘンリー・ジェイムズと Mr. Warren（ギリシャ聖教の信者でしたが）くらいだと、ひとりの学生が嘯いたのを懐かしく思い出すのです。

話をジェイムズの *The Portrait* に戻しますと、神戸女学院大学に就職してまもなく、おそら

く本学における最初の「公開講座」になったと記憶していますが、「文学におけるヒロイン」シリーズに参加した時にも、『ある婦人の肖像』のイザベル・アーチャーを取り上げました。その後、日本英文学会1980年度全国大会でのシンポジウム「*The Portrait of a Lady*を読む」のパネリストとして発題する機会が与えられたのも、ジェイズが取り持つ縁といえるでしょう。もっとも、わたくしの一番気に入っているジェイズの作品は、*The Wings of the Dove*『鳩の翼』(1902)なのですが、教室で頻繁に取り上げたのは、やはり、彼の初期の傑作、1881年に出版された*The Portrait of a Lady*です。この聴衆のなかに、かつてのゼミ生たちの顔が見えますが、卒論のテーマに取り上げられたジェイズの作品の中では、やはり『ある婦人の肖像』が一番人気だったのでないでしょうか。今年(1998)、阪大で「19世紀のアメリカ作家とイタリア」という題でホーソーとジェイズを学生たちと読んでいますが、大学で正規の講義をする最後となる年に教室で読んでいたテキストが*The Portrait of a Lady*であるのも不思議な偶然である気がいたします。

随分、前置きが長くなりましたが、今朝はタイトルにありますように「*The Portrait of a Lady*との40年——ジェイズが書かなかったこと」と題して少しお話をしたいと存じます。「ジェイズの書かなかったこと／言わなかったこと」というのは、丁度二年前、ジェーン・カンピオン監督によってジェイズの小説が『ある貴婦人の肖像』として映画化されましたが、カンピオンの映像テキストとジェイズの文字テキストとの比較に触れるつもりだからです。

## II. 女性版 bildungsroman

*The Portrait of a Lady*は「デージー・ミラー」と同様にジェイズにおける「国際もの」=international theme、いま風には「異文化体験もの」を扱った作品に分類されます。ジェイズはニューヨーク版の序文で、「自分の運命に立ち向かおうとするあるひとりの若い女のイメージ」=“the conception of a certain young woman affronting her destiny”が小説の構想になったと述べ、続けて「知的あるいは知的でない生意気な女性がいっただうしたら、小説の主題となり得るのだろうか」、「彼女たちの運命にどのような可能性が見られるのだろうか」、と自問自答いたします。『ロミオとジュリエット』ではジュリエットが、『アダム・ビード』、『フロス河の水車小屋』、『ミドルマーチ』ではヘティ・ソレル、マギー・タリヴァー、ロザモンド・ビンシィが当然、重要な存在でなければならない。しかし、これらのヒロインたちが、自己の存在を主張するにもかかわらず、個々の場合を取り上げてみると、残念ながら彼女たちを作品の興味の中心にするには“困難な社会層の典型”=翻訳しますと“女というジェンダー”に属すると。だから、ディケンズもウォルター・スコットもあえて女性を主人公にして、主題を負わせようとしなかったのだ(47-48)と述べ、自分は『ある婦人の肖像』においてイザベル・アーチャーの「大騒ぎを」を作品の中心に据え、西洋文学の伝統であるビルドングスロマン=教養小説の女性版を試みたというのです。まず、イザベルがいう彼女の「運命」の浮き沈みに沿って論を進めたいと思います。登場人物の人間関係(図1)をご参照ください。

イザベル・アーチャーというニューヨーク出身の自立心——作品中“independent”、“she is

fond of her liberty”が多用されます——に富んだ好奇心旺盛な「若い女」の前に、音信が途絶えていた父方の叔母タチェット夫人が突然、現れ、イザベルをヨーロッパに誘います。母親に早く死別し、いま父親を亡くしたばかりのイザベル(23歳)は叔母の申し出を喜んで受け入れ、テムズ川畔にあるイギリスで銀行家として成功したアメリカ人ダニエル・タチェット氏の由緒ある館「ガーデンコート」にやってきます。この「ガーデンコート」を出発点として、才気煥発、想像力豊かで人生を素晴らしい自己修練の場とみなしている、まさにエマスン流「自己信頼」“self-reliance”を体現したようなヒロインの「冒険」、「武者修行」が始まるのです。

19世紀後半ヴィクトリア時代に女性に期待されたことは、まず結婚、そして、「家庭の天使」として次代を背負う子弟の育成、教育という任務でした。ですから、文学の世界においても、求婚・結婚が伝統小説の一大テーマだったのです。したがって、『ある婦人の肖像』においても、イザベルのまえに次々と求婚者が現れます。(図1)のように三人の男性がつぎつぎとイザベルの前に平伏し、熱い思いを打ち明けるわけです。ところが、「20人中19人の女性はその申し出を断らないだろう」というイギリス貴族、ウォーバトン卿のプロポーズをこのアメリカ女性はいとも簡単に断ります。その理由が「私の運命を逃れることはできないから」=“I cannot escape my fate”というのです。なぜなら、イザベルは「ひとりの男の出現によって自分の運命を決められたくない」、「自分の人生は自分で創造したい」と確信しているからです。つぎに、ボストンからイザベルをヨーロッパに追ってきた紡織工場主で紡織機の特許考案者でもある、敏腕の青年実業家キャスパー・グッドウツの申し出も、彼の男性性=攻撃性が彼女の「自由を奪う」との理由で拒絶いたします。

従兄のラルフは、そうしたイザベルの「武者修行」を半分ユーモラスに観察し、目の前に繰り広げられる求婚劇を戯画化するのです。

...he [Ralph] found much entertainment in the idea that in these few months of knowing her he should observe a fresh suitor at her gate. She had wanted to see life, and fortune was serving her to her taste; a succession of fine gentlemen going down on their knees to her would do as well as anything else. Ralph looked forward to a fourth, a fifth, a tenth besieger; he had no conviction she would stop at a third. She would keep the gate ajar and open a parley; she would certainly not allow number three to come in (324).

貴族院に議席を有し、イギリス国内に散在する広大な領地や幾つもの館の所有主であるウォーバトン卿のプロポーズを断る女が、いったい、どの様に輝かしい人生を歩むのだろうか、と周りの者たちは好奇の目をもって、彼女の行く末を見物するのです。しかし、ラルフの意に反して、イザベルが友人たちの反対を押し切って結婚相手に選んだのが第三番目の求婚者、フローレンスに住む出自のはっきりしないギルバート・オズモンドという祖国喪失のアメリカ人。そのうえパンジーという15歳の娘のいる寡婦だったのです。自由意思を行使して選んだ相

手だと信じていたのが、じつは、叔父のタチュット氏が分与してくれた莫大な財産目当てに、マール夫人とオズモンドが仕掛けた罠に陥ったことを、イザベルはずっと後になって知ることになります。

皮肉なことに「自由でありたい」と願って選んだ結婚相手が、妻に自分以外の考えを持つことを禁じる男だったという「不幸な結婚生活」でイザベルの受ける試練が小説の後半部で展開されていきます。小説の終り、イザベルの「冒険」の出発点「ガーデンコート」に駆けつけ、彼女の理解者であった従兄のラルフの死を看取ったイザベルを、オズモンドと離婚して自分と新しくやり直そうと、グッドウッドが再度熱心に説得するのです。が、彼の求愛を振り切って、イザベルがローマに戻るところでジェイムズの小説は終わります。

1997年暮れに亡くなった作家の中村真一郎はジェイムズに多大の影響を受けた小説家ですが、彼は、『ある婦人の肖像』のなかに「様々な新しい可能性」を認めながらも、「それにしても長過ぎる、読者はもう一度、嘆息する。モーパッサンなら同じ題材を30枚のコントに仕上げただろう」と穿ったコメントを記しています。しかしながら、「心の領域を可視化」するジェイムズ文学は「エスプリのきいたコント」にはならないのです。前半部はそれぞれの求婚者に対してイザベルが示す優柔不断さ、後半部は不幸な結婚を甘受するヒロインの深層意識、その内面の苦悩を可視化するには、ニューヨーク版の二巻ーペンギン版636頁ーの紙幅が必要なのです。

“Wedding is destiny, and hanging likewise”=「結婚は運命、絞首刑もご同様」といったのは、シェイクスピアと同時代のジョン・ヘイウッドという劇作家ですが、これは単なる警句でなく、近代まで文学に描かれるヒロインにとって文字通り「結婚は経験の終わり」=「死」だったのです。ですから、当然、ヒロインの結婚で小説は大団円を迎えるわけです。イザベル・アーチャーの場合も、「運命に挑戦しよう」と、求婚を拒否するものの、運命=結婚を回避することができなかったということです。ただ、ジェーン・オースティンやシャーロット・ブロンテなどの伝統的英国小説と『ある婦人の肖像』が違うところは、前者がヒロインの結婚で閉じられるところ、ジェイムズの小説では、不幸な結婚をとおして如何にヒロインが試練を受け、精神的成長を遂げるかが、小説の関心事となっている点です。なぜなら、主人公の精神的成長を跡づけるのがビルドゥングスロマンなのですから。イザベルが自らの失敗を潔く認め、その責任をとって「まっすぐな一本の道」を歩む決意するところで、彼女の「冒険」は閉じられます。

...She looked all about her; she listened a little; then she put her hand on the latch.  
She had not known where to turn; but she knew now. There was a very straight path  
(636、強調執筆者)。

この結末に多くの読者は不満を示してきました。ジェーン・カンピオン監督の映画の結末も、テキストに忠実で曖昧だと不評を買ったようですが、この問題については後で触れることにし

ます。

### Ⅲ. 「求婚／結婚」のテーマ解体

以上、ジェームズが *The Portrait of a Lady* を女性版ビルドゥングスロマンとして構想したことを、小説の筋を追ってご紹介したのですが、私はここで、ジェームズが『ある婦人の肖像』において、19世紀の伝統的英国小説の重大なジャンル「求婚・結婚小説」の解体を、期せずして行ったと主張したいのです。

近代小説の技法として、全知全能の作者でなく、“a point of view”＝「視点」を導入したジェームズですが、彼の円熟期の作品と違って *The Portrait of a Lady* においては、いわゆる物語の外にいる omniscient author＝「語り手」の侵入が目立ちます。この「語り手」の介入が『ある婦人の肖像』を自己言及的小説としているのです。「語り手」の干渉をとおして、小説という虚構空間と現実との落差がかなり意識的に言及されます。一つ例を挙げますと、ウォーバトン卿がイザベルにプロポーズする時の陳腐な台詞「一目惚れなんて、小説のなかの戯言と思っていたのに、自分が恋をしてはじめて、小説のなかの出来事が根も葉もないことでないことがわかった。小説を見直した」(158)とイザベルに告白するところなど、「求婚・結婚小説」の空間と日常の現実、虚と実との差異が意識的に指摘されます。

さらに、先ほどイザベルが俗に言う「良い縁談」を次々と断る様子をラルフが、カリカチュア化している箇所を引用いたしましたが、これも求婚劇における女性に対する慇懃無礼さを誇張したものと読めるのです。ラルフはヒロインが伝統的ビルドゥングスロマンのヒーローよりしく、城攻略の戦術の「アレゴリー」として話すのですが、彼の母親、実利的なタチェット夫人に、「謎解きのように話さず、わかりやすく話して欲しい」と言わせていることから作者の意図、つまり、女性をヒーローにしたビルドゥングスロマンの枠組みをかりながら、「求愛・結婚小説」を解体する意図が見えてくるのです。

作品中に描かれる結婚、家庭というのも、当時ヴィクトリア朝の規範から逸脱したものばかりです。最初に触れた小説の冒頭場面、夏の終わりの午後のお茶会で幕があくのですが、典型的イギリス儀式といえるお茶会の異常さ——お茶を楽しんでいるのは三人の紳士だけ——が指摘されます。というのも、ホステス役を務める筈のタチェット夫人はアメリカとヨーロッパを行き来して、夫とは別居同然の結婚生活を送っています。銀行家として成功したタチェット氏の結婚は決して幸福なものでないとコメントされます。

母親に「不埒な男と政治的結婚をさせられた」オズモンドの妹エイミー、ジェミニ伯爵夫人は、自分も勝手気ままな放埒ぶり、愛人を持つことを憚りません。彼女の姪、パンジーも幼いながら結婚に何の幻想も抱いていませんし、ヨーロッパ上流社会における結婚の実体を鋭く観察し、見知らぬ男の「妻」となるより、「父の娘」でいる方がよいとイザベルに打ち明けます(367)。エマスンと親交のあったジェームズの父親は、結婚の義務、結婚の神聖さを主張して結婚制度を弁護する論陣をはった文人として知られていますが、ジェームズ自身は結婚というものに懐疑的であったようで、「賢い人間は結婚なんてしないもの」とラルフに言わせていま

す。またヨーロッパに来る以前のイザベルも、「何も結婚しなくても、女性は自分だけでも素敵な人生は送れるはず」と友人のヘンリエッタと息巻きます。

； she held that a woman ought to be able to live herself, ... that it was perfectly possible to be happy without the society of a more or less coarse-minded person of another sex (106).

さらに、イザベルやパンジーの例に見るように、結婚市場において「よい縁談」を取り仕切るのに絶大な影響力を持つ母親の「不在」は、求婚／結婚小説としての『ある婦人の肖像』の致命的欠陥を露呈するものです。

#### IV. ジェイムズ／イザベルとローマ体験——denouement をめぐって

小説の結末をめぐって、批評家たちの間で議論がされてきたことは周知のとおりです。イザベルは「パンジーとの約束を守るためローマに戻る」という見解が多いのですが、すでに触れましたように、大抵の読者が結末の曖昧さを忌々しく受け止めるのです。ここでイザベルの選択——“a very straight path” (636) を消極的決断と見るのではなく、生を肯定する決断とわたくしは読みたいのです。ジェイムズにおける「自己放棄」、「自己犠牲」を積極的に考えてみたいのです。

1998年6月はじめ、“The Nineteenth Century Americans in Rome”=「19世紀のローマのアメリカ人」という国際学会がローマで開催され、その国際ホーソーン学会で“Henry James and the ‘Roman Fever’”というペーパーを読む機会がありました。この課題は、わたくしにとっ  
ていま始まったばかりのテーマで、結論をだすのは早すぎるのですが、ローマというトポスが30歳前の若きジェイムズに与えた影響は、その後のジェイムズの作品や作風に重大な影響を及ぼしたと考えます。ジェイムズは小説以外に多くの旅行記を手がけており、『イタリアの時間』= *Italian Hours* や『フランス小旅行』= *A Little Tour in France*、など、比較文化論として、これから研究の対象にされてよい資料ですが、いまは、ジェイムズのローマ体験がどの様に、イザベルのローマ体験として反映されているか簡単に考察して、イザベルの決断を読み解くひとつの鍵にしたいのです。

『ある婦人の肖像』の時代背景をおよそ、1872年からの5年間としますと、丁度ジェイムズがイタリアに旅行した時期と重複します。ジェイムズは1869年に、はじめてローマを訪れますが、その後、共和国になったイタリアを1873年に再び訪れています。ジェイムズが両親のもとを離れてはじめて解放感を感じた時期は『ある婦人の肖像』においてイザベルがフローレンスやローマを訪れる時期と重なるのです。この小説が書かれたのがジェイムズのイタリア滞在中だったこと、冒頭のガーデンコートを除けば、ドラマの舞台はほとんどフローレンスとローマになっています。結婚後、イザベルはローマでオズモンドと暮すのです。ローマというトポスがジェイムズにそして、*The Portrait of a Lady* のヒロイン、イザベル・アーチャーにどの様



な異文化体験をもたらしたか、一例をご紹介します。

彼らのローマ体験はまず、美的体験から意識の深層へと深められると言ってよいでしょう。「ローマの休日」という随想のなかで、ローマ中がカーニヴァルで浮かれている時、旅行者がふと入った裏通りの教会のなかで、仮装者たちの喧噪をよそに、ひとり瞑想に耽っている若い僧侶の姿に旅行者は興味を惹かれます。

....In the entirely deserted place he alone knelt for religion, and as I sat respectfully by it seemed to me I could hear in the perfect silence the far away uproar of the maskers. It was my late impression of these frivolous people, I suppose, joined with the extraordinary gravity of the young priest's face—his pious fatigue, his droning prayer and his isolation—that gave me just then and there a supreme vision of the religious passion, its privations and resignations and its terribly small share of amusement (129).

旅行者ジェームズが垣間見た黙想する僧侶のイメージは、旅人の脳裏に鮮やかな残像として記録され、それがヒロインのイメージと重ねられるのです。

イザベルが愚かしくも美化したオズモンドでなく、現実の夫の真実を知った後、ローマの郊外を逍遙しながら、イザベルが行う一種の苦行と重ねられているのです。ローマという歴史の重みをもつトポスがひとりの人間に語りかける有限の時間と人の運命＝the continuity of the human lot の神秘性をイザベルが身をもって経験する過程が、小説後半部42章に見事に描かれています、以下はその少し後の章からの引用です。

She had long before this taken old Rome into her confidence, for in a world of ruins the ruin of her happiness seemed a less unnatural catastrophe. She rested her weariness upon things that had crumbled for centuries and yet still were upright; she dropped her secret sadness into the silence of lonely places, where its very modern quality detached itself and grew objective, so that as she sat in a sun-warmed angle on a winter's day, or stood in a mouldy church to which no one came, she could almost smile at it and think of its smallness. Small it was, in the large Roman record, and her haunting sense of the continuity of the human lot easily carried her from the less to the greater. She had become deeply, tenderly acquainted with Rome; it interfused and moderated her passion. But she had grown to think of it chiefly as the place where people suffered (564).

結婚という「冒険」＝体験をとおしてイザベルが認識した深い悲しみと無名の人々との共感、彼女を精神的高めへと導くのです。この「宗教的経験」の思想的背景は、ジェームズの兄、ウィ

リアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』(1902)に見ることができます。ウィリアム・ジェイムズがその著書で述べている“saintliness”=「聖人らしさ」——品格という高度に洗練された自己放棄という概念に行きつくのです。自己認識に到達した人間の選択に、自己放棄あるいは自己犠牲という選択肢がありますが、それは極度に高められた「宗教的境地」に裏付けされたものなのです。ウィリアム・ジェイムズはそうした境地を“saintliness”ということばで説明するのです。“[T]he Equanimity, Resignation, Fortitude, and Patience which the faith in human love brings and unaccountable feeling of safety”(230)。「人間愛に裏付けされた、ことばには言い尽くせない安堵感、平静さ、勇気、忍耐」と。そうした精神的境地に立てば、なぜ、イザベルがキャスパー・グットウッドの情熱的求愛を拒絶して、ローマに戻るのか理解できるでしょう。

ジェイムズの小説のタイトル、*The Portrait of a Lady* の「レディ」ですが、イザベルはアメリカ女性、貴族の出ではありません。しかし、イザベル・アーチャーはレディ=淑女なのです。“noblesse oblige”=「高貴の義務を心得た人間」という意味でのレディなのであり、レディとしての選択——自己認識に到達した人間の選択と解釈されるべきなのです。もっとも、「お上品な伝統」といわれたヴィクトリア社会の欺瞞性、閉塞性を「レディ」というシニフィアンに課した皮肉な題名ととることもできるのですが、わたしはシニカルな解釈をひかえます。

## V. おわりに——ジェイムズの書かなかったこと／言わなかったこと

1996年に上映されたジューン・カンピオンの『ある貴婦人の肖像』はジェイムズが書かなかったイザベルのセクシュアリティを明確に視覚化した作品としてわたくしは評価します。イザベルの姓アーチャーは「月の女神、ダイアナ」を象徴し、貞節を表わします。ジェイムズのテキストに表出されたイザベルも「貞淑、清潔、気品」のイメージが支配的です。それが災いしてか、かなりの批評家がイザベルに「不感症」との誤診を下してきましたが、イザベルを不感症と診断するフロイト的読みはテキストの誤読です。なぜなら、ジェイムズはイザベルのセクシュアリティをきちんと文字にしているからです。

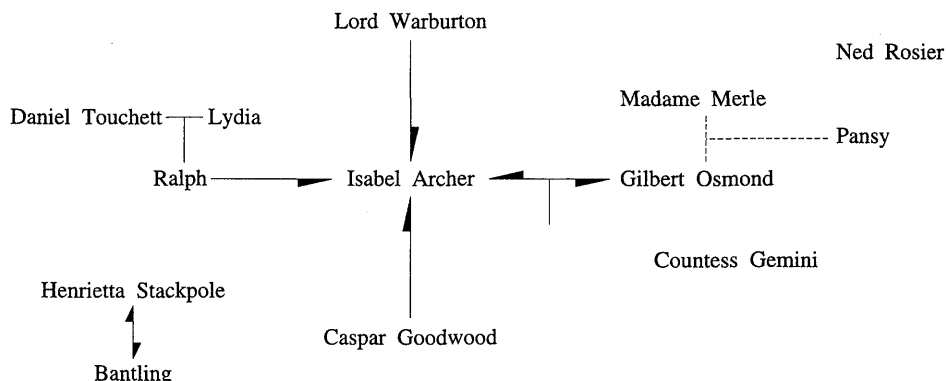
小説の前半部、イザベルが求婚者たちとの会見後、必ずといっていいほど、ひとりになると涙を流す場面があります。涙を流すことの意味はヒロインの、言語にならない不安や心理の深層に潜む自らのセクシュアリティの認識を表しているのです。イザベルの言語にならない気持ちを、ジェイムズは涙を流すという行為で表現しようとしたのです。視覚メディアをとおしてそのことに気づかせてくれたのがカンピオンの映像テキストなのです。ジェイムズの文字テキストを新たに読むと作者ジェイムズが、イザベルのなかのエロスをきちんと書いていることが歴然といたします。

映画を見られた方には鮮明な残像が残っていると思います。ボストンからイザベルを追ってイギリスにきたグッドウッドが、ロンドン見物にやってきたイザベルのホテルに彼女を訪ねる場面。イザベルが邪険にキャスパーを追い返した後、ジェイムズのテキストではひとりになったイザベルが祈るような姿勢でじっとしている場面を、映画では、グッドウッドが部屋を去る

とき、イザベルの顔を手で触れてから出ていきます。その手の感触を愛おしむようにイザベルは自分の手で触れベッドの上でうっとりするシーンがあります。とても美しくエロチックな映像です。もう一つ、結婚前、マール夫人とオリエントに旅行したとき、エジプトの砂漠でのファンタジーも若い女性が夢想するようなエロチシズムが映像化されていますが、この場面はジェイムズなら“*It's in bad taste*”=悪趣味だ、と顔を蹙めたかもしれません。さらに、オズモンドを演じている俳優がジョン・マルコヴィッチなのですが、彼がまた中年男の恐ろしいほどにねっとりとしたセクシュアリティを表現して、清潔なアメリカ女性であるイザベルがその魔力に魅入られていくのが、視覚をとおしての説得力が文字テキストで読むより効果的になっています。これはカンピオンが小説に書かれたものを見事に視覚化したと言ってよいでしょう。もちろん、映画を手厳しく批判するジェイムズ研究家も大勢いますが、わたくしはカンピオンの試みはひとつの解釈として評価したいのです。

最終講義のタイトルを「ジェイムズが書かなかったこと／言わなかったこと」といたしました。結論を申しますと、ジェイムズはかなり克明にイザベルのセクシュアリティの問題の核心に触れていたことが、カンピオンの映像によって明らかにされたように思います。つまり、書いていたということです。*The Portrait of a Lady* というテキストが内包する数々の可能性に触れましたが、これでこの小説をすべて解明したとは申しません。70年代から80年代にかけて、文学批評においてこれまで無視されてきた「読者」、「読者の読む行為」に焦点をおく「読者反応理論」が浮上してきました。これを拡大解釈すれば、読者にとってテキストも一種の鏡のようなものでないでしょうか。何度となく紐解くテキストは、その時々を読み手を映し出します。これからも、『ある婦人の肖像』を読む度に、その時々イザベルの肖像がすこしづつ、ずれて見えることでしょう。これからも、どのような顔が現れるか楽しみにしていきたいと思います。

図 1



#### 参考文献

Edel, Leon. *Henry James: A Life*. New York: Harper & Row, 1985.

Fussell, Edwin Sill. *The Catholic Side of Henry James*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.

James, Henry. *The Portrait of a Lady*. 1881; New York: Penguin, 1986.

\_\_\_\_\_. *Italian Hours (1873–1907)*. ed. John Auchard. Penn State UP, 1992.

James, William. *The Varieties of Religious Experience*. Intro. Reinhold Niebuhr 1902; New York: Collier Book, 1961.

Krook, Dorothea. *The Ordeal of Consciousness in Henry James*. Cambridge: Cambridge UP, 1962.

Stevens, Hugh. *Henry James and Sexuality*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.

(原稿受理1999年4月1日)